指定討論

戸田山和久
（名古屋大学）

戸田山です。興味深いお話をいただきまして、大変刺激を受けました。どなたにと言うわけではなく３人のお話を伺って、全体として考えたことについて質問を含めて簡単にコメントしたいと思います。

コメントは３つあります。

1. 仮想敵は行動主義か？

最初に、荒川さんと松本さんは、今の心理学のメインストリームのあり方に違和感を感じていて、それに対して、自分たちの質的なアプローチを対抗させていきたいと考えておられて、その仮想敵を「行動主義」と呼んでいるのだと思います。そして、そこで行動主義と呼ばれているのは、ワトソンやスキナーの行動主義のような狭い意味ではなくて、その後の認知心理学も含めて、今の心理学のありかたを規定している方法論としての行動主義だったと思います。

渡辺さんは、先ほどのお話の中で、狭い意味での行動主義、徹底的行動主義と呼ばれるスキナーの考え方が心理学のメインストリームになったことはないだろう、むしろ質的研究を進めていきたい人が仮想敵としているのは方法論的行動主義なんだろうと説明しておられました。この整理は、なるほど見事だと思いました。私もこの会で話をせよと言われたときに、え、何でいまさら行動主義なのかと大変疑問に思ったのですが、この方法論的行動主義が仮想敵とされているのがわかって非常に頭がクリアになりました。ですが、方法論的行動主義が質的アプローチと対比されて、やっつけなきゃいけないものだと考えられるのは、それでもまだちょっとミスリーディングなような気がしています。一つは、現代の心理学で「行動」とは、およそ測定可能なもの全てですよね。すると、行動をデータとするのが、方法論的行動主義だと規定すると、測定可能なものをデータとするのが方法

論的行動主義だということであり、方法論的行動主義というのはほとんど空虚なカテゴリになってしまうのではないでしょうか。およそどんな科学でもデータにできるのは、測定可能なものだけなのです。だから、質的アプローチが嫌がっているのは、このこと自体ではないと思います。質的アプローチだって、ナラティブなデータを取りますし、ナラティブなデータだって、測定可能と言う意味では、行動といえると思います。

だから，荒川さん・松本さんが違和感を感じているのは、測定した後の処理の段階の扱い方なのではないかと思いました。つまりここで批判しているのは、数量化であるとか、そこに課されるもっと強い意味での客観性、例えば「同行したんじゃ駄目だ、そういうのは、松本さんの主観的な思いにすぎないのでではないか」のような批判なのでしょう。だから「方法論的行動主義がけしからん」という言い方は、自分たちが攻撃したい相手を正確に表していないんじゃないかと思います。この点については、後でぜひご意見をいただきたいと思います。

2. 科学を支えるサーキュレーション

2 番目は、渡辺さんが最後のスライドで、心理学をどうやっていくかという方向についてラディカルなものまで 3 つ道筋を示していただいた点に関してです。第一の道筋は、客観性の基準をゆるめたり、ナラティブなものもデータと認めることによって、質的研究として行われているもののある部分を今のスタンダードな心理学の中に取り込んでいく方向でした。それは可能だと思いますし、やればいいと思います。

ただし、もうちょっとラディカルに、質的研究が、今の心理学に対するオルタナティヴになるかどうか、そして、そのときに両者をどうやって比べるのかという話をします。つまり、かなり深いレベルでの方法論の対立があるときに、2 つのリサーチプログラムの優劣をどうやってつけたらいいか、または比較したらいいかというちょっと哲学的なお話をしたいと思います。

そのときに、方法論というものを単独で取り出してきて、たとえば「行動主義的な方法論だから、この方法はいかんぞ」と議論することはおそらくできなくて、おそらく方法ですから目的があって、目的に照らした上で、方法の優劣を争わなければいけないと思います。さらに、方法論が科学の認識論的な要素だとするならば、その科学の目的に加えてもう一つ大事な要素として、存在論的な要素があります。つまり、その科学が扱おうとしている対象がおおよそどんなものか、これを渡邊さんは、世界観と呼んでいたと思います。この目的、方法、存在、の 3 つの equilibrium（平衡）というかバランスがとれているのが非常に大事です。「けしからん行動主義」に支配された今のメインストリームの心理学は、

私の見解ですけど、単に、社会的な理由や時代精神、その方法ではたくさん研究が出るから分野が栄えるといった理由だけではなくて、メインストリームになるだけの理由があると思うんです。つまり、科学哲学的に見て、認識論的に強い点、優れた点があるゆえに、メインストリームになっているので、そこのところをきちんと見て、理解した上ではないと、批判することはできないのではないかと思います。それはどういう点かというと、この３つの連関が非常に良くとれているという点です。

私が言いたいことを、別の例でお話しさせていただきます。ガリレオは天体望遠鏡をつくって、いろいろなものを発見しました。たとえば月は、丸く光っていると思われていたのですが、そうではなくて、岩、岩石らしいとわかったり、木星にも衛星が回っているらしいことがわかったりしました。これは地動説に都合のいいデータなので、ガリレオはこの新発明の望遠鏡を使って得たデータで、地動説が正しいと主張しました。しかし、これに対して、天動説を信じる人、つまり、地球が真ん中にあって、星が回り回っているという理論を信じている人からは、天体望遠鏡なんかを使って天文学をしては駄目だという批判がなされました。その理由は、存在論的なものでした。天動説を唱えている人たちは、地球を作っている物質と、天体を作っている物質は全く違う物質で、天体を作っているのは重さ O のエーテルという物質だと考えていました。そのため、地球の物質で作った天体望遠鏡で、いくら天体を見ても、その姿がただしく捉えられる保証がない。つまり、望遠鏡が、地球の物体を大きく見せてくれることには異論はないが、それは地上の物体同士の相互作用だからであり、天の物体を作っている元素と、望遠鏡との相互作用について何も知らないのだから、望遠鏡で見えたとおりのものがそこにあると考えるべきではないと主張したわけです。

当時の望遠鏡は、今から考えたら未熟なもので、実際ちゃんとみえないですから、それもあって、この地上の元素をもとにして作った望遠鏡を使って天文観測をすること自体が受け入れられないと主張されたわけです。

つまり、宇宙がおおよそどんなかについて、地球が真ん中にあって天体がその周りが回っているという世界観と、そうではなくて太陽が真ん中にあって、その周りを地球が回っているという世界観、それによって使える方法論が違ってくると考えられます。前者の世界観に立つと、地球の物質でできた天体望遠鏡は使ってはいけない。逆にいえば、天体望遠鏡を使えるということは、後者の世界観を要求します。というわけで、対象がおおよそどんなものか、どんな方法論を使うのか、そしてその対象に何がしたいのか、という 3 つの要素がある。そしてこの３つがお互いに強めあって良性の循環になっているときに科学は非常に強いのです。現在のメインストリームの心理学というのはこれが成り立っている

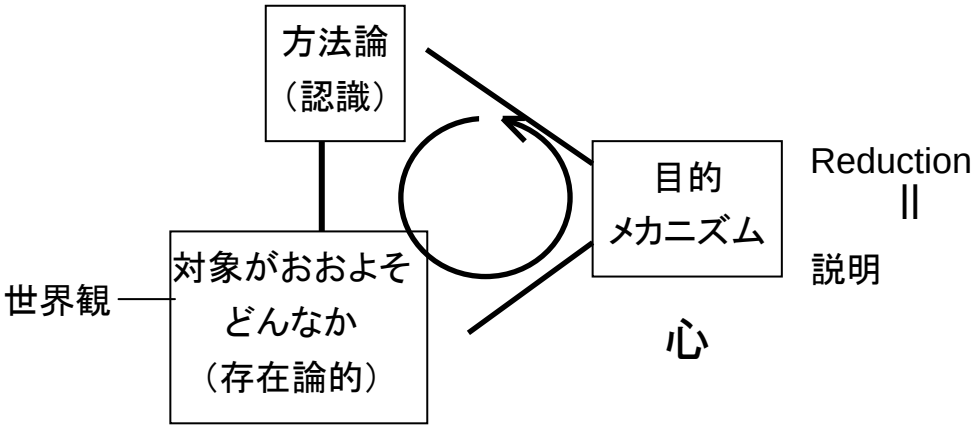
と思います。

たとえば、世界観として、「心っていうのは、インプットがあって、アウトプットがあって、情報を中で変換しているのだろう。」そして「これはモジュラー化されており、このモジュラーから他のモジュラーで行われているプロセスは直接はその中身を見れないから、直接本人の目には見えません」とか。「この心のこの中の仕組みは、進化的に獲得されたものでしょう。進化的に獲得されたものだから、おおむね人という種ではだいたい一緒でしょう、だいたい一緒だけど変異があるから正規分布するでしょう。」と、心についておおよその世界観がある。さらに、このおおよそどんなものかに基づいて、それについて何を知りたいのかという目的はというと、知りたいのは、そのメカニズムを探求すること、この心の中でどのようなメカニズムで処理しているのかを説明すること。しかもその説明というのは、還元（リダクション）による説明です。心全体の働きをモジュールの働きの組み合わせとして理解していこうというリダクションを与えられたときにメカニズムの説明がなされるという具合に、還元的メカニズム説明を与えるのが心理学の目的としてある。そしてその方法は、心とはおおよそどんなものかという世界観に基づいていて、それゆえに、たとえば「統計を取ろう」と考えたり、「内観はあてにならない」という方法論的考慮が正当化される。こんな風にやっていると、やがていろんなものがわかってきて、世界観が方法を裏書きしてくれて、そして、そのことによって、メカニズムの説明が与えられて、わかった観が出てきたぞ、とこれがぐるぐるぐるぐるまわっている。こんなに短期間でこのサイクルを作り上げた心理学ってすごいと私は思います。

質的研究というものを、これを補うものとして位置づけずに、本当にオルタナティヴとしてたてるなら、何をしなければならないかというと、質的研究に関しても、この３つをはっきりさせないといけない。そして、これをぐるぐる回して、お互いがお互いを強めあうサイクルを作らないと、メインストリームの心理学のライバルになれない。それができているかどうかが、こういったメインストリームの心理学に対するオルタナティヴの強さを測る尺度となる。そう考えると、ちょっとまだ弱い気がします。

方法論的行動主義に対する批判が、前述の 3 つのうちの方法論をどうするということだけを焦点にして考えていると、批判の対象とか批判の方法を見誤ってしまう可能性がある。方法もそうですが、目的も世界観も、特に目的、科学による説明は果たしてリダクションでいいのかも検討しなければならない。だから松本さんがしなければならないことは、科学の目的はどういうものかについて、従来のものに取って代わる目的を設定し、心とはおおよそどういうものかについても、メインストリームに取って代わる緩いモデルをたて、そして、この対象について、この目的が果たしたい場合にはエスノグラフィックな方法や

同行という方法が合理的だということを示さないといけない。



3. 科学を支える三つの基盤が違った場合

次に、この３つが全部全く異なった２つのプログラムがあったらどうなるかを考えてみましょう。この場合は共約不可能で、違うことやっていることになってしまいます。たとえば物理学と化学とどっちが偉いのって聞くことはナンセンスなことですよね。両方は違うことをやっている。違う対象に対して、違う目的をもって違うアプローチしているわけですから、優劣比べようがないんです。もしかしたらエスノグラフィックなことやっている人がやろうとしていることと、メインストリームの心理学がやろうとしていることはそのくらい違っている可能性があるわけです。だけど、どっちのアプローチがいいかという論争が成り立つようにみえるのは、両者の対象としているモノを緩く日常語で「心」と呼んでいるからです。だから、それぞれの立場の人が、「それじゃあ心はわからない」とお互いに言いあっていても、それは無いものねだりなんです。ちょっと露骨なたとえになってしまって申し訳ないですが、進化学やっている人に、創造科学やっている人が、「君たちは神の摂理を扱っていないじゃないか、神の摂理は君たちのアプローチではわからない」というのと同じことになっちゃうわけですよね。

渡邊さんがおっしゃった 3 番目の道っていうのは、ここまで食い違った場合のことだと思います。わたしももしかしたらそれくらい食い違っちゃっているのかも知れないと思います。でも、そうだとしても、新しい分野が取るに足らないつまらない分野になると言うわけではなくて、実はこれは、ずっと人類がやってきていることだと思うんです。モラリストの伝統と言われるもので、非常に鋭い人間観察をして、「こういう人いるよね。」、「こういう人って、こんなことをするよね。それって彼の頭の中でこんなことが起こっているんですよね。」「そう考えるとこの人のことよくわかるでしょう。」とやっている流れだと思います。たとえば、古代ギリシャの時代では、テオフラストスという人が『人さまざま』

という本で、鋭い人間の類型化とか、一人称的な視点に立ってその観察対象の人が世の中をどう見ているのかとか、その人にとって、こういうことされるとこういう意味を持っているのだ、といったことを記述しています。そういう文学とかモラリストの伝統のきわめて洗練されたものをやっていく方法もあるのではないかと思います。もし全然比べようのないものとしても、そういうものとして位置づけることができるし、それは価値のあることだと思っています。

最後に一言、カントが心理学は科学ではないと言ったのは、有名なんですけれども、カントが科学ではないとした心理学は、モラリストの伝統のほうの心理学です。カントは科学であるためには数量化できなければいけないという強い信念を持っていました。数量化できないようなものは科学にならないと考えていたのです。では、質的な心理学がくだらないものかと思っていたかというとそういうわけでもない。彼は『人間学』という本で、エスノグラフィといってもいいようなものすごいモラリスト的な分析をやっているんです。他方で、彼は、数量化を含んだサイエンスとしての心理学を、psychophysics のなかに見いだしていました。psychophysics は当時、ちょっとだけ出始めていて、彼は、その psychophysics こそ将来は心の科学になるだろうと思っていたのです。カントはこの２つをまったく相容れないものと分けた上で、どっちも大事だよといっていた、と思います。